

school

高岡市伝統工芸産業技術者養成スクール

教わるのは、最高の技。そして、心。
懸命に学ぶ姿勢に夢が磨かれる。



金工コースの授業風景(上)
「金工の楽しさに目覚めたのは、学生時代」という喜多章江さん(左)



平成18年度金工コースの受講生の作品

「もっと高い技術や知識を身につけたくて通い始めましたが、漆は金工の楽しさに目覚めたのは、学生時代」という喜多章江さん(左)

「スクールの終わってからといって、終わりじゃない。ここは、ぼくにとつてスタートです」と、妥協せず自分の作品をつくりたいと語る。

第1期の卒業生には、重要無形文化財保持者(鍔金)の大澤光民さんがいる。大澤さんは、6年間通ったという。

「スクールで、ものをつくる喜びを知り、考え方や人間性も教わりました。そのおかげで今の自分がある」と養成スクールの意義を熱く語る。

ほかに、ここで学び伝統工芸士やクラフトマンとして活躍する人は多い。

養成スクールで学ぶのは、技術だけではなく、最高の技を通して一人ひとりのなかに育まれていくものがある。

学ぶ意欲にあふれた受講生たちに、次世代への夢がふくらむ。

カンカんと、塹たがねの音が響く。ここは、デザイン・工芸センター1階の工房。受講生が、強さや角度を調整しながら図案を彫っている。真剣な表情である。2階では、漆の下地塗りや蒔絵を制作。誰もが自分の作業に集中している。

毎週水曜日、ここでは「伝統工芸産業技術者養成スクール」の授業が行われ、平成18年度は47名の受講生が学ぶ。

この養成スクールは、昭和43年に高岡市特産産業技術者養成スクールとしてスタートし、現在まで745名もの修了生を送り出している。

銅器・漆器の技術者を対象に、デザイナーの知識と基礎技法の修得、制作に必要な材料、技術に関わる実践的内容で、

地場の技術力向上、人材育成を目的としている。

コースは、金工と漆工の2つ。講師は、高岡市伝統工芸産業技術保持者や伝統工芸士などが務めている。

金工の研究コースに学ぶ喜多章江さんは、高岡短期大学金工科を卒業し、鋳造業である家業を手伝いながら養成スクールで彫金を学んでいる。

「こんなに優れた技術を持つ先生に指導してもらえるところは他にないですよ。将来はここで学んだことを生かして、鋳物をやっていきたい。いつか自分で鋳造したものに彫金してみたいですね」と語る。

山村高明さんは、漆工の研究コースに学ぶ。家業は、漆の製品を扱っている。

「もっと高い技術や知識を身につけたくて通い始めましたが、漆は



「スクールの終わってからといって、終わりじゃない。ここは、ぼくにとつてスタートです」と、妥協せず自分の作品をつくりたいと語る。

第1期の卒業生には、重要無形文化財保持者(鍔金)の大澤光民さんがいる。大澤さんは、6年間通ったという。

「スクールで、ものをつくる喜びを知り、考え方や人間性も教わりました。そのおかげで今の自分がある」と養成スクールの意義を熱く語る。

ほかに、ここで学び伝統工芸士やクラフトマンとして活躍する人は多い。

養成スクールで学ぶのは、技術だけではなく、最高の技を通して一人ひとりのなかに育まれていくものがある。

学ぶ意欲にあふれた受講生たちに、次世代への夢がふくらむ。



漆工コースの授業風景(上)
「養成スクールは、視野を広げてくれた」と語る山村高明さん(左)

受講内容

金工	年限	日時	年間回数
基礎コース[彫金]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
研究コース[彫金]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
専門コース[鋳造]	1年	第2、4土曜日午後1~5時	約20回

漆工	年限	日時	年間回数
基礎コース[塗り]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
研究コース[螺鈿・蒔絵]	2年	毎週水曜午後6時~9時	約30回
専門コース[鍔絵]	1年	第2、4土曜日午後1~5時	約20回



平成18年度漆工コースの受講生の作品